

医療 と 哲学

第53回

臨床死生学からみる 生と死の問題を取り巻く流れ

新潟大学大学院保健学研究科教授
小山千加代

はじめに

死学、死生学、臨床死生学という言葉が、現代社会の人々はどれほど承知しておられるであろうか。死を研究テーマとするような学問があるのかと、多くの人は不快になり、目をそらしたくなるのが当たり前のことのように思われる。しかし、昨今は、国のあり方も国同士の関係も、社会政策のあり方も、医療制度も、そして人と人との関係も、「より良く生きること」とは反対に向かいつつあるのではないかと、憂鬱な気持ちになるほど、「ひとつの生命がその生命をまっとうすることに優しくない社会」のありようである。

一方、死という不快な言葉が用いられてはいるが、死学も死生学も臨床死生学も、限りなく「生きることに優しい」眼差しを向け続ける「学」を目指している。私はそのように理解している。死をわきまえているからこそ、生をいきいきと語るができるとも言えよう。

本稿ではまず、生と死の問題が考えられるようになった経緯と関連学会の成立について述べる。

次回および連載第3回目において、臨床死生学の中でも特に高齢者の看取りの問題を取り上げて、看護の立場から、また家族を看護した個人的な体験に基づいて「老いること、看護すること」について省察したい。

生と死の問題が考えられるようになった 経緯および関連学会の成立

1. 臨床死生学 (clinical thanatology)

タナトロジー (thanatology) という言葉はギリシア語のタナトス (thanatos, 死) とロゴス (logos, 学問) を合わせた造語であり、直訳すれば「死学」であるが、我が国では日野原らが、死のみならず死に至るまでの人生を如何に生きるかを含めて「死生学」と名付けた¹⁾。なお、石津によると「美術史を概観すると死は人間を描く限り避けられないテーマで、その表現も多様であるが、そこでの死の取扱いは生と一体化した死であり、メメント・モリ (死を思えよ) と、メメント・ヴィヴェレ (生を思えよ) が対になっている」旨を述べている²⁾。